

設計演習 I

第1 課題

リノベーション

〈都市（街）の愛すべき古い建築に命を……〉

第2 課題

都市型集合住宅

〈「集まって住む」ということの意味を問い直す〉

3年1組

担当＝
横河 健

第1 課題

富田 舞

都市の愛すべき古い建築に命を／古い建築を現代、さらに次代へ誘導する試み／この古い建築を生物としてとらえてみる／美しい殻をかぶるさなぎのように／そっと手を伸ばし、美しい殻の中で行われている細胞の増殖、並び替えを眺める／完全な形になって飛び立つまでの準備は次から次へと行われる／実験

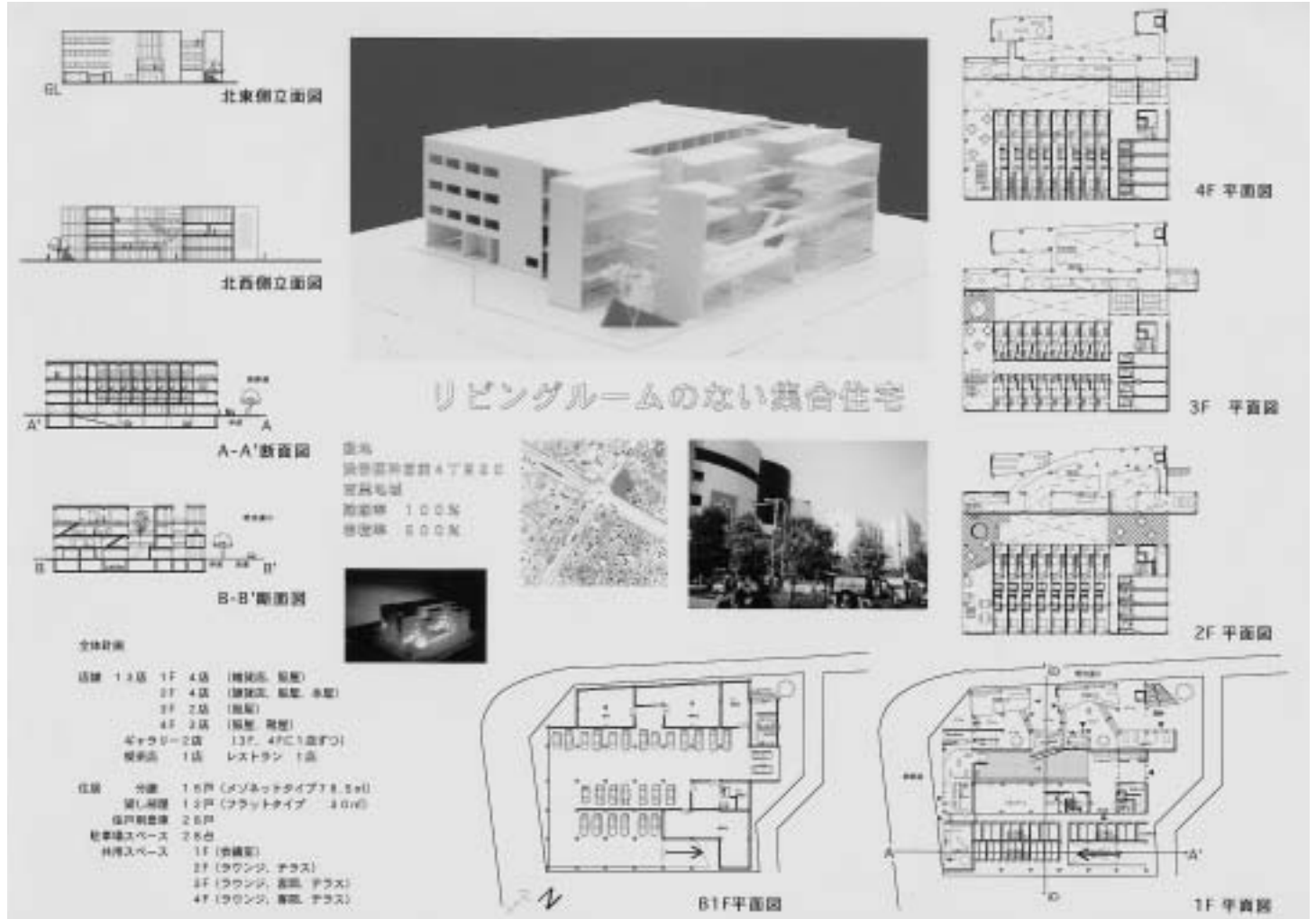
室のシャレの上でこの一連のできごとを観察するように／都市の中に位置するある基壇の上で／この古い建築は完全体になるまでの準備をすすめてゆく三信ビルでもっとも興味を持ったのは基壇だった。条件として与えられている「アートとのかかわり」と第一印象の「基壇」を重ね合わせると、ある光景が思い浮かぶ。基壇にすわり絵を描く人、基壇に描いた絵をたてかけのんびりと売れるのを待つ人、基壇に腰掛け通り過ぎる人々を観察しながらおしゃべりする若者たち。この光景を作りだすには美術専門学校にすべきだと考えた。三信ビルの外観は三層構成であ

る。これに対応して1～2階ギャラリー、3～6階専門学校、7・8階ドミトリーの三つの機能を持たせる。三信ビルは美しいグリッドにのって構成されている。その骨格をそのまま使ってリノベーションを行う。ここではある日骨格として残っている三信ビルに訪れた三人の行動と、それに伴う空間の生成を設定する。

指導＝横河 健

都市「街」の愛すべき建築に命を……。ということで古い歴史的建築、今回の課題では東京日比谷の三信ビル（1929年設計：横河工務所）に新しいプログラムと内部空間についての提

案を求めた。日本の大都市では世界的に例を見ないほどのスクラップアンドビルドを繰り返して現在に至っている。このプロジェクトは、建築に新しい命を与えるばかりでなく、都市の街並みを考え、人々の記憶を断絶することなく歴史を構築する試みである。富田さんは、三信ビルの建築の特性を、歴史的様式建築の特徴でもある三層構造の基壇部分に認め、その現代建築にない特性を現代のアートギャラリーや美術学校建築に活用されることを考えた。また、三層構造を維持しながら内部空間の構成も三つの異なる機能に分解している。また三信



ビルが持つ均等ラーメンによる立体グリッドを用いて内部空間を使用するアーティスト、寄宿学生らによって増殖、組み替えが行われるという。この様式建築の中に現代的な均質空間が生まれるという対比も面白いし、ここを使用する人々のケーススタディとしてのシミュレーションも興味を引くが、プランなり断面なりの図面による建築表現がされていないのは片手落ちである。しかるにここでは、唯一考え方や、設計プロセスとして特殊な思考回路のみを注目し評価することとした。

片町 健
 この計画は、大きくわけて分譲マンションと、貸し部屋、それに、店舗から成り立つ。貸し部屋は、分譲マンションの住民のための、勉強部屋、書斎、あるいは、2世代住宅として利用されるため、キッチンユニットをはずしてある。またリビングルームを各住戸からはずしリビングの機能である、接客と、団らんの空間を共有スペースに入れている。これにより、家族間のみならず、住民間のつながりも膨らませていくことを考えている。

指導=横河 健
 「都市型集合住宅の新しいプロ

グラムと、新しい提案を求め」。「このことを前提に、日本の大都市の持つ問題“高密度と自然”“商業と住居”など、相対する問題を都市の集住のなかで考えるものである。とくに東京、原宿表参道と明治通りとの角地という若者なら誰でも知っている場所に敷地を設定し、商業地としての活動的な魅力と、本来落ち着いた静寂の中にあつた住居地域が背中合わせにあるという、都市の矛盾した特徴が顕著に現れた場所に新鮮な提案を求めた。
 手掛かりは、明治神宮への表参道であるという歴史的コンテクストに求めるもよし、青山通りや渋谷、新宿へと続く商業の掘

点としての人の流れに注目するもよし、基本的条件以上にどんなプログラムを組むか？ 都市性が持つ特徴を集住の魅力に変える提案を求めたものである。片町君プロジェクトは、都市の集住とSHOP、レストランなど商業の活性化を巧みに区分けしながら、人々の出会いや新しい家族像の提案が隠されている。表参道や明治通り沿いには、レストランやショップが散在し、レベル変化を付けながらSHOPの間を散策する楽しさを生み出している。
 住居部分は2、3、4階をマルチユのユニテのごとく上下のメゾネットに組み上げて3階の通り抜け街路を利用して共有ス

ペースと連続させるなど、都市性を高めている。また特に片町案の特異な点は、住居内に居間的性格の部屋を作らず、積極的に家族の共有部分を住居外の共有部に移すことによって、他の家族(単身の場合も含めて)とのつながり、付き合いを高めていることである。こういったコモンは中庭を介してよりパブリックなレストランや喫茶店と相互に見えかくれするなど、段階的な共有スペースの使い方が、これからの都市型集合住宅としてのリアリティを高めているのではないだろうか。欲を言えば、立面にもSHOPの平面に見られる楽しさが表れると良かったのだが……。